

不思議な眼鏡

－子供の視点について思うこと－

これはもう 10 年くらい前の話だ。友人と電話で話していたときのことである。その友人は何年も前に結婚していて、ちょうどそのころ、6 歳の娘さんと 4 歳の息子さんを育てていた。

「二人もいると、子育てが大変だね。」

そんな私の言葉に、彼女はくすくすと笑い出した。そして、こんなエピソードを語ってくれた。

「おとといね、晩ごはん食べたあと、私は後片付けがあったから、息子を一人でお風呂に行かせたの。それでね、お皿を洗ってたら、急に後ろに誰か立ってるのに気がついたのよ。振り向いたら、ニコニコと笑う息子が立ってたんだけど、なんとびしょびしょのバスタオルを身体に巻き付けていたのよ！」

私は目を丸くする彼女の顔と、その後、風呂場から台所までの濡れた床を必死に拭く彼女の姿を想像し、思わず笑ってしまった。

「子どもって何をするか、本当に予測不可能だね。」

「本当よ！もうびっくりしちゃって、思わず叫んじゃったわよ。『なんでこんなことしたのよ！』って。」

すると、お母さんの目をじっと見て、彼はニコニコしながらこう答えたそうだ。
「だってお風呂があったかくて気持ちよかったから、一緒に連れて来たかったの。」

その答えに、私は大笑いしながら、なんだかそのお風呂のあたたかさが、私の体や心にも伝わってくるように感じた。

子を持たない私は、なかなかこうした面白い場面に出会う機会がない。でも子を持つ友人から似たような話を聞くことがある。

急に子どもが言う。

「ねえねえ、お母さん！電柱が泣いているよ！」

見上げてみれば、電柱からポタポタと落ちる雨水。

急に子どもが言う。

「見て見て！青空を踏んじやったよ！」

ふと足元を見ると、水たまりに映った青空。

月夜の中、家路を急いでいた時に、子どもが話しかけてくる。

「ねえねえ、お月様がずっとついてくるよ。一緒に帰りたいのかな。」

こんな言葉を聞いていると、子供は生まれながらにして詩人じゃないかと思ってしまう。まるで、彼らは私達大人が持たない特別な眼鏡でこの世界を見ているようだ。しかし、私たち大人も子供だったころは、そんな不思議な眼鏡を持っていたはずだ。

どこでなくしてしまったのだろう。その不思議な眼鏡について考えることは、私達大人をなつかしくて、それと同時に、さみしいような気持ちにさせる。

小さく弱いものとされている子供は、大人が守るべき対象だと普通の人なら考えるだろう。しかし実際にこの世界を守っているのは不思議な眼鏡を持った子供たちなのかもしれない。

そんな子供たちに守られた世界で、私たち大人もあの不思議な眼鏡を探してみよう。きっとそれほど遠くでなくしてしまったわけじゃない。それは春の木漏れ日や雨上がりにかかる虹と同じぐらい、私たちがいつもは気にしないような場所に、今もひっそりと存在している。

(1142 字)

(2022.7 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典 : 「たどくのひろば」 (<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.